第 23 回 AAF 戯曲賞選評

山口茜

今回、この審査という役を引き受けるにあたって、私は、静けさを、動力を失うことと捉えていない視点を大切にしたいと思いました。これは劇作の中に葛藤を含まなくて良いという意味ではなく、ビジョンの話です。もちろん脚本の優劣でもありません。したがって、最終審査もなるべくその視点が含まれた作品が残るようにと考えて、話し合いに挑みました。

『Plant』は、ストーリーテリングに工夫を凝らし観客を物語にひき込みたい、という意気込みに惹かれました。ただどうしても思いついた設定にこだわるせいか、登場人物がその設定のために存在しているような印象を受けました。最初の思いつきや問題意識というものを港だと考え、人間という大海に漕ぎ出してみるとより素敵な作品になるだろうと思いました。私もこれが怖くていつも足がすくむのですが、そうすればもっと面白い作品になるだろうという期待の持てる作品でした。

『Fusion,（フュージョン、）』は、ト書きの文章が美しく、会話以上に身体がものをいう戯曲だと思いました。神話や絵画に絡んだ言葉が出てくるのですが、もちろんそういったことは観客の一部にしか届かず、この届かなさを届けたいということが強く伝わってきました。ただ、傷つけることでしか関係を結べないという人間描写を、見続けたいと思う力が今の私になかったというのが最終的に手を挙げなかった理由です。

『落ちる』は、エネルギーをもっとも強く感じた作品でした。終始声を出して笑いながら一気に読み終えました。ただ、自分のことを徹底的に自嘲するという姿勢が、他者を巻き込んで傷つけていく、ということをどう考えるべきか悩みました。「ただ戯曲を書くために書く」という能力は誰にでも与えられるものではないからこそ、それを多くの人のために役立ててほしいという思いで、今回は手を挙げませんでした。

『良いキャンペーン』は、私が最後まで推した作品でした。戦争や災害の様子を SNS で簡単に目撃できるようになった現代で、大きな爆弾が落ちた後の日本を描くという設定に興味を持ちました。話のトーンは終始軽やかで、モノローグを頼りに進みます。最初は捉えどころのなさを感じたのですが、繰り返し読むうちに、一つ一つのセリフに惹かれている自分に気がつきました。登場人物の誰も、激しい感情を表現しないのです。いや、一度だけ「フェイクだよ！」というところだけ、もしかしたらあれは、怒っているのかもしれません。この作品には、食事のシーンや食べ物の描写がたくさん出てくるのですが、そう言った手触りのある体験を他者と共有したいとい

うのがこの作品の強いメッセージではないか。そう考えると、作中で誰かが、誰か、何かをあからさまに恨まないのは、恨むべき本当の相手が戦争や爆弾を落とした国ではなく、私たちの心を曇らせるフェイクそのものだからなのかもしれません。この戯曲はあくまで、自分の中のフェイクを自覚し、他者と手触りで繋がろうとする試みでした。ぜひその試みを、劇場で体験したいと感じました。特別賞受賞、おめでとうございます。

『いみいみ』は個人的に、過去、大阪のウイングフィールドという劇場で実際に観劇し、この作品をフェミニズムの視点から語る機会を持ちたいと考えて、メニコン シアターAoi で上演して頂いたという経緯があります。したがって、戯曲の確かさについては疑っていませんでしたが、自分の審美眼を証明したいがために推すという可能性が自分の中にあったので、今回はあえて推薦せずに審査に挑みました。それでも二次審査、最終審査で、私以外の審査員が強く推す姿を見て、改めてこの作品の普遍性が証明されたことを嬉しく思うと共に、演出する人によって、いろんな表情が引き出される可能性を孕んだ作品だったのだという発見もありました。受賞おめでとうございます。上演が楽しみです。